

MAGAZINE HOUSE MOOK

BRUTUS
1995 AUTUMN WINTER
1200YEN

CASA



Vivere in Campagna

田園に暮す。

Mobile, Mobile!

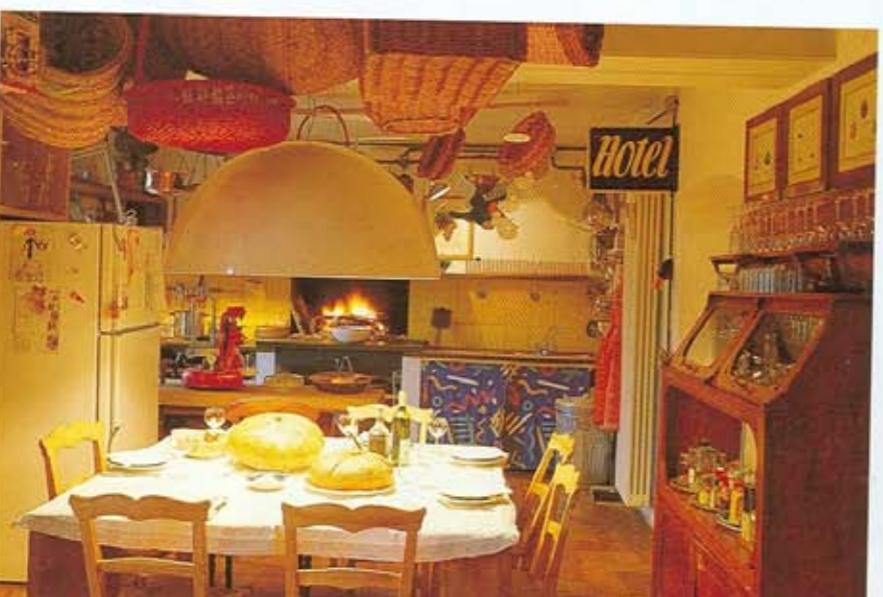
誘惑のイタリア家具大図鑑。



庭から眺めたミレージ邸
敷地はいったいどれくらいあるの
か想像もつかない。右の茂みの
向こうに馬小屋、犬小屋がある。
このほか、小さな馬場、温室など
が敷地内にある。

根を葺き換えたのと、開口部のサッシ類を取り換えたくらいで、外観はほとんど全く手を付けていない。一方、インテリアは建築家らしく徹底的な改装を施した。さらに、入居12年目になるが、この間、子供の成長に合わせ、また使ってみて初めて分かる不備を直すため、何度も小さな改修を行なつていているという。ところで、エドアルドは以前から乗馬が趣味で、いつかは田園で生活を考えていたが、かといって都市が嫌いなわけではない。都市

には都市にしかない魅力や長所があることも事実だ。ただ、朝眼を覚まして窓の外を眺めると、日々風景が少しずつ変化している。いわば四季の移り変わりを感じることができるのは、田園に暮して初めて味わえる醍醐味だと彼はいう。
ちなみに、現在家族5人のこの田園の家に同居しているのは、馬4頭のほか、犬5匹、ダイニングを常宿とするオウム1羽、鹿や屋根を駆け回るリスト5匹だ。



ダイニングからキッチンを眺める。
食生活は、住環境によって大きな影響を受けることが容易に想像できる。ちなみに、夫人は最近ワインに凝っていて、ソムリエの資格試験に合格したばかりという。



3階の多目的リビングルーム。
大きな窓が、この部屋を境内で最も魅力的な空間にしている。ここは家族が集まる団欒の空間であったり、エドアルドの仕事場になつたりと、様々な用途に使用される。



1階のキッチン風景。炉(火葬場)に利用したり、暖を取るためにだけではなく、空間を和やかにする機能を果たしている。
都市生活では今では絶滅した習慣でもある。



Edoardo Milesi
ARCHITETTO, ALBINO, ITALIA

馬4頭、犬5匹、 オウム1羽、野リス?匹、 ともに暮す生活。

日本で馬が飼える家というのは、いったいどんな人が住んでいて、どんなところにあるのだろう。おそらく、庶民の感覚で素直にとらえられるような人でもシチュエーションでもないよう気がする。

ベルガモ市内で建築設計事務所を主宰するエドアルド・ミレージは、市内から車で10分ほどのアルビーノという小さな町に購入した家に、きわめて普通の感覚で馬を4頭飼つて

いる。イタリアの生活インフラの豊かさには、今の日本は逆立ちしても通い付けないのだ。それはさておき、エドアルドは以前ベルガモ市内で住宅着工事務所のマンションに住んでおり、この家に入居することになったきっかけは、結婚して子供ができること、そして経済アナリストだった夫人が市内であぐせく働いて、子供と家の世話を専念することを遠んだことだった。

建物自体は、入居前2〜3年空き家だったが、傷みはひどくなく、屋